

令和元年6月28日現在

機関番号：34302

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H05665

研究課題名(和文) ニカラグア考古学調査と博物館づくりを通じた地域の持続的開発と発展に向けた研究

研究課題名(英文) Research for sustainable development of the region through Nicaragua archaeological survey and field museum management

研究代表者

南 博史 (MINAMI, HIROSHI)

京都外国語大学・国際貢献学部・教授

研究者番号：00124321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,700,000円

研究成果の概要(和文)：マウンド1内部に主体部相当の土坑を確認するとともに、マウンドの構造が明らかになった。ニカラグアでは初めての構造であり注目できる。測量調査によって、遺跡が円形の大型基壇とその周辺に配されたマウンド群で構成されることが明らかになった。これらのマウンド配置がキラグアの山並みと何らかの関係があるのではないかと推測している。

博物館活動を継続的に実施した。住民のアンケート調査やワークショップを開催し、調査成果を可視化し共有することで、住民の意識を向上させ、住民主体による文化財の保護と活用、さらには地域への直接的間接的還元に向けた活動となった。地域資源活用に向けた第2段階に進んできていると判断できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

考古学調査によって、ニカラグアでは初めて全容が見える遺跡となった。さらにマウンドの構造と主体部が明確になった学術的価値は高い。一方、土器の編年づくりについては今後の課題となった。今後はこうした資料の獲得と遺跡の構造を明らかにする調査が必要である。

こうした学術的成果をフィールドミュージアム活動として普及してきた。住民に「もっと知りたい、学びたい」という意欲もみられ、住民の意識は明らかに高くなっている。研究目的が達成されている。今後は、コミュニティ・ミュージアム設立とフィールドミュージアムの持続可能な住民参画の仕組み、学校との連携、具体的な地域還元に向けて引き続き活動していく必要がある

研究成果の概要(英文)： While excavating the main equivalent inside the mound 1, the structure of the mound was clarified. It is the first structure in Nicaragua and can be noticed. The survey revealed that the ruins consisted of a large circular platform and mounds arranged around it. It is speculated that these mound placements have something to do with Kiranga's mountains

Conducted museum activities continuously. Questionnaire surveys and workshops were held, and the results of the survey were visualized and shared. As a result, the awareness of the residents was improved, and the activities led to the protection and utilization of cultural properties by the residents, and direct indirect return to the area. It can be judged that we have advanced to the second stage for regional resource utilization.

研究分野：考古学

キーワード：アメリカ地中海文化研究 総合政策科学 フィールドミュージアム コミュニティ・ミュージアム 持続可能な開発 文化財ガバナンス 内発的開発 考古学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ラテンアメリカ・カリブ海地域は、近年目覚ましい成長を遂げ、中産階級が増加し貧困層が減少した。しかしながら、ニカラグアでは1人あたりの国民所得は中米で最も低い(1800ドル、2014年『世界開発報告2013』)。とくにマタガルバ県など中部～北部山地、ならびにカリブ海沿岸地域はニカラグアの中でも高貧困地域として分類されており、オルテガ政権は、農村部での飢餓撲滅・生産振興を目的とした「飢餓ゼロ計画(アンブレ・ゼロ)」等の社会プログラムを推進。持続的農村開発のための教育と健康が課題の一つとなっている(2013年度版『貧困プロファイル ニカラグア共和国』、独立行政法人国際協力機構)。

こうした中において、代表者はマタガルバ県マティグアス郡ティエラブランカ地区において、考古学と博物館を仲介者とした実践的地域研究を開始した。

この研究の目的は、地域を博物館とみだてて地域の遺跡などの文化財を活用し、地域文化に立脚した持続可能な地域社会モデルを作ることにある。そして、平成26・27年度科研費(挑戦的萌芽)日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金の助成によって、遺跡試掘、地域事情調査、住民との交流活動を実施した(南博史、辻豊治「ニカラグア共和国マタガルバ県における考古学・社会学調査研究報告」京都ラテンアメリカ研究所『紀要』第14号、平成26年)。一方、新たな課題も明らかになった。

(1)考古学的課題

調査地は、ニカラグア国立自治大学考古学情報機関(以下、CADI)の2010年キラグア山系西麓地域踏査で初めて報告された(Balladares, Sagrario, ed., "INVENTARIO NACIONAL DE SITIOS ARQUEOLOGICOS", CADI, 2011)。約20のマウンド(土盛遺構)と長さ4.5mの男根状モノリット(中米特有の石柱。中でも最大)が確認された当該地域の中心的遺跡である。

調査ではモノリット東側の最も大きいマウンドを発掘し、頂部に石組構造物に使われていたと思われる石群を確認した。その中心になっている石材集中部の方位と背後のキラグア山系山並みの位置関係から、このマウンドが天文観察のための祭壇と推定した(南博史、ニカラグア共和国マタガルバ県マティグアスにおける考古学調査2015)、『京都ラテンアメリカ研究所研究報告』平成28年3月)。建造物と天体運行、山を神聖視する文化は古代メソアメリカ(嘉幡茂、「古代都市シヨチカルコ:ブランド化されない世界遺産」、『共生の文化研究』3号、115-122頁、愛知県立大学・多文化共生研究所)との比較文化研究が課題である。

またキラグア山系西麓の遺跡群は、ニカラグアにおける初の集落研究の場となる。集落研究が進むメキシコでも一般住居を対象とした研究が少ない。メキシコ・テスココ地域の遺跡の属性と分布から後古典期セトルメント・パターンに特化したパーソンズの研究手法と成果(Persons, Jeffrey R., "Patrones de asentamientos prehispanicos en aregion de Texcoco, Mexico", Universidad Autonoma Chapingo, Chapingo, 2008)を発展させた先駆的な研究が可能である。

(2)地域活動の課題

こうした考古学調査成果を、博物館的活動(写真展や小学生発掘現場体験など)を通して地域社会に還元していく研究を行なった。マティグアス郡の各村長-マティグアス市民-ティエラブランカ村住民など各アクターへの活動報告やアンケート調査を通して、考古学を仲介者とした地道な住民との交流が、地域の文化財やプロジェクトへの関心を高めることが確認された。

なお今後は、人と人の信頼関係の下、直接的利益に結びつける草の根的活動が求められることを踏まえ(加賀美充洋『貧困国への援助再考 ニカラグア草の根援助からの教訓』、アジア経済研究所、平成12年)活動を継続していくこと、住民参画の意識を醸成すること、具体的な活動方法を提案し実施していくことが課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ニカラグア共和国マタガルバ県マティグアス郡ティエラブランカ地区ラスベガス遺跡の学術的重要性を明らかにした上で、遺跡とその周辺、キラグア山系西麓地域をフィールドミュージアムと見立て、先住民の文化財の博物館的活用を通して、当該地域が慢性的に抱える貧困、教育問題の解決と持続的な開発と発展を可能とする具体的方法を地域住民と協働し、見つけることにある。その上でニカラグアの文化遺産の保護に関する政策的含意を読み解き、博物館活動を通じた住民主体の地域活性化モデル、すなわち日本ならではの現地との堅固な信頼関係に基づく草の根的援助の基盤を整備する。

3. 研究の方法

(1)発掘調査を実施し、遺跡の文化財としての学術的価値を明らかにする研究。

ラスベガス遺跡の測量調査とマウンド1の発掘調査を、研究期間中に継続的に実施する。また、出土遺物の編年的研究による当該地の時期編年を作成する。

(2)地域住民と協働した遺跡の発見と保護・活用を目的とした文化財ガバナンス研究を行う。

キラグア山系西麓に広がる遺跡に関する情報収集を住民協働で行うシステムをつくる。集めたデータによって「遺跡情報マップ」を作成する。さらに、適宜地域住民への報告会や勉強会を実施し、プロジェクトについて普及活動を行う。

(3)ミュージアムづくりに向けた実践的博物館活動を実施する。

調査拠点をコミュニティ・ミュージアムとして整備し、住民に直接利益のある具体的な博物館活動プログラムを作る。

4. 研究成果

(1) ラスベガス遺跡考古学調査成果

マウンド1の発掘調査

ア. 全体の概要

ラスベガス遺跡では、およそ40のマウンドが確認されており、そのうち最も大きなマウンド1の発掘調査を2014年から継続して実施した。

2015年に行ったマウンド頂部から裾部に設けたトレンチの発掘調査の結果、このマウンドは方形の土台を2～3段重ねた形状であることを確認していた。

2016年度からは、マウンド頂部での発掘調査を実施した。こればこのマウンドの性格を明らかにするためである。

期間中、5期にわたって行った発掘調査の結果、上層部で確認した集石群と、その下部で確認した列石との2時期に分かれてマウンドの改築が行われている可能性を指摘したい。

上層の集石群は、何らかの構造物が崩壊したものではないかと考える。下層については以下のような所見を得た。

イ. 調査

調査は、マウンド1の頂部で確認した集石群を取り除いた後、構造内を掘り下げる形でトレンチ3m×1.2mを設定した。その結果、マウンド1南壁、西壁にかかる位置で土坑を確認した。この土坑の内部は、石と土の層が交互になっており、底部からは炭化物が検出された、現在炭素年代測定を行っている。

また、マウンド1の構造内の土層を確認できた。これによると土坑上層で確認した直径約20～30センチ程の石列が土坑の位置と相応する位置にあったことがわかる。また、これをトレンチ全体からみると小石の層と土の層が交互になっており、一端この面でマウンド頂部が成形されていたのではないだろうか。

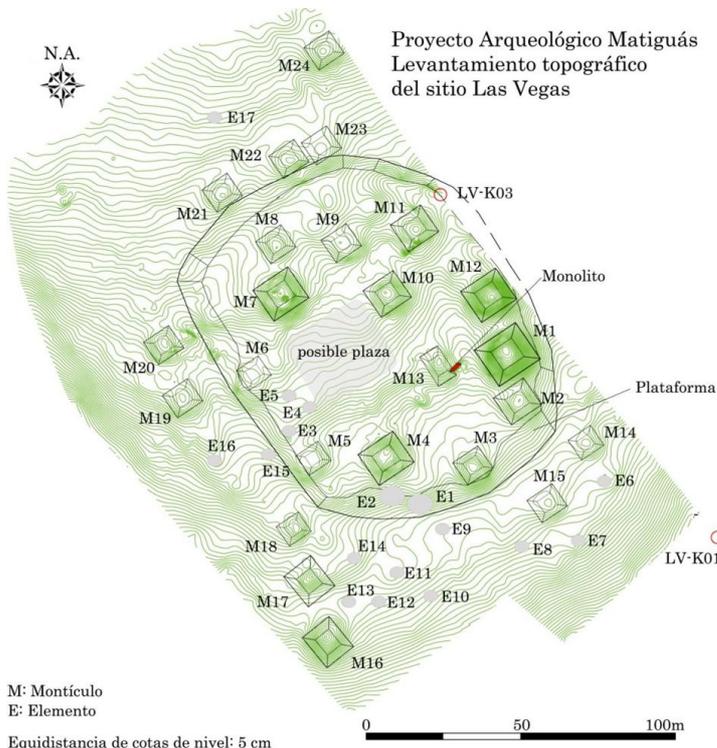
なお、マウンドの最下層で確認した礫層については、このマウンドの地山と判断しているが、この層の下からまだ土器片が数個出土しており、今後のマウンド裾部の調査の成果を待ちたい。

ウ. 結果

マウンド1のほぼ中央、底部から炭を多く含む土坑（ピット）が検出されたことから、この土坑がマウンド1の主体部であると判断した。また、小石の層と硬い土の層が交互に重なるマウンドの構造が明らかになった。共同研究者であるサグラリオ・バジャダレス氏によると、ニカラグアではこのような層を成す構造をもつ建造物は現時点では確認されていないということから、他地域との比較研究が必要となる。

測量調査

2017年に行った約44,000㎡の精密測量によって、これまでに確認されていた約40のマウンド群は広場を囲むように配されたマウンド群とそれを区画する溝、あるいはこれらが位置する円形の大型基壇とその周辺に配されたマウンド群で構成されることが明らかになった。また、これらのマウンド配置がキラグアの山並みと何らかの関係があるのではないかと推測している。



マウンド上層部で確認した集石群の一部にも方位との関連を示唆した例を確認しており、各マウンドの配列関係を考察することが今後の重要な研究テーマである。

遺物研究

ア. 土器

現時点において、ラスベガス遺跡では完形品が出土しておらず、また土器表面の劣化が激しいため、器形と器面調整などの製作技法の同定が困難である。したがって、器面に施された装飾の種類と分析に留まる。約200点の分析を実施したが刻線文や刺突文、条痕文や赤色化粧土など、アメリカ大陸で広く見られる装飾が中心で、現状ではまだラスベガス遺跡の土器相は曖昧なままと言わざるを得ない。

しかしながら、他地域の土器との比較から、おおまかな遺跡の年代

について指摘しておく。今のところニカラグア太平洋岸の土器編年を適応するしかないが、ラスベガス遺跡ではサポア期に属する多彩文土器がほとんど出土しないことから、バガセス期以前に遺跡が繁栄したのではないかと考える。今後はさらなる発掘調査による土器と層位情報と他地域との比較から、ラスベガス遺跡の土器相を明らかにしていくことになる。

イ. 石器

約 1200 点の石器の分析を行った。これによればラスベガス遺跡では、チャート製の石核と剥片が多量に出土しており、また破損した石皿や磨石、磨製石斧なども出土している。

石器組成をみると、石核と剥片の多さから、ラスベガス遺跡では石器製作が行われていた可能性が高いことがわかった。しかし、石核が全て小型であることから、大型切削具を製作した可能性は低く、遺跡で出土した大型切削具は他の場所から持ち込んだようだ。また、狩猟や戦闘に用いる刺突具が少なく、日常生活で用いる切削具が多いことから、遺跡の性格を考える上で大変興味深い。今後は、さらに石器の顕微鏡分析による使用方法の特定や石器組成について他の遺跡との比較をすることで、ラスベガス遺跡における生業や遺跡の性格についてより詳細に解明することができると考えている。

(2) 博物館活動の成果報告

本プロジェクトの考古学と並んでもう一つの柱は、博物館学的な手法を用いた教育普及活動である。発掘を始めた 2014 年以來、調査終了時には毎回地域住民を対象に調査報告会を開催し、写真展や遺跡見学会なども行ってきた。また、これらに平行して住民のアンケート調査やワークショップを開催している。調査成果を可視化し共有化することで、住民の意識を向上させ、住民主体による文化財の保護と活用、さらには地域への直接的間接的還元に向けた文化財ガバナンスの研究でもある。

3 年間の調査で、住民からのアンケート結果などを踏まえ、おおむね 3 つのテーマで進めることができた。

調査報告会・写真展

2016 年、ティエラブランカ地区住民を対象に調査報告会とグループワーク、遺跡見学会を実施。京都外国語大学とプロジェクトの概要を紹介する写真展も同時開催し好評だった。住民の参加も平均 50 名を越えるようになり、こうした活動が住民の参加意識を高めることに効果があることがわかる。

児童向け考古学ワークショップ

「子供向けのワークショップ開催」の要望を小学校から受けて企画した。遺跡見学終了後、児童には「昔のティエラブランカ村」と題して、先住民の暮らしや当時のラスベガス遺跡を想像した絵を描いた。その絵は調査報告会の際に展示した。

ティエラブランカ地区および周辺の地区住民を対象としたワークショップ

おもなテーマは、コミュニティ・ミュージアムづくりと地域開発、文化財保護と活用ネットワークづくりである。コミュニティ・ミュージアムづくりについては、博物館やコミュニティ・ミュージアムに関するワークショップを経てマティグアス市長の支援もあり実現に向けた活動につながられている。

一方、フィールドミュージアム活動についての 2019 年 3 月実施のワークショップでは「ティエラブランカ観光開発」をテーマに設問を 3 つ「観光開発についてどう思いますか?」「どのようなサービスを提供できますか?」「サービスの提供にあたり何が必要ですか?」設定し、グループに分かれて意見を出しあった。

おおまかな回答は、以下である。

設問 1: 肯定的で村の経済発展を期待する声が多かった。またコミュニティ外との交流を期待する声も出ていた。

設問 2: 観光ガイド、馬やバイクなどの移動手段、食事宿泊の提供、手工芸品の販売などいわゆるモノの提供と、農業体験や窯を使った伝統的な料理体験、エコツーリズムなどいわゆる体験の提供。

設問 3: 政府の援助、経済・物資の支援など外に援助を求める意見と、コミュニティが主体となって、リーダーの育成や、読み書きを含む言語の習得、遺跡や文化遺産(周辺地区含めた文化財保護と活用ネットワーク)、マネジメントなどについて学ぶ機会など、コミュニティ自主的な発展を希望する意見が出た。

結論

これらのことから、ティエラブランカ地区住民がコミュニティの本来の魅力・価値を認識し始めており、地域資源活用に向けた第 2 段階に進んでできていると判断できる。これもあって「もっと知りたい、学びたい」という意欲もみられた。

今後、第 2 段階として、コミュニティ・ミュージアム設立とこれをコアとしたフィールドミュージアムの「持続可能な運営とサービスの提供」、住民参画の仕組み、具体的な地域還元に向けて、地域住民と引き続き話し合うことになる。

さらに、今回の児童向けワークショップのように、ティエラブランカ地区やマティグアス郡内の小・中学校教員は、当プロジェクトと協力して、積極的に考古学やワークショップの実施・参加を希望する姿勢がみられた。これらを持続し定着していくための活動として、マティグアス郡の教員の間で共有できる「マティグアス地域史・考古学の教科書づくり」を検討したい。

5. 主な発表論文等

南 博史「ニカラグア共和国マタガルバ県におけるプロジェクト・マティグアス 2014-2015 年調査報告」『京都外国語大学国際文化資料館研究紀要 MUC』第 12 号、査読無、2019 年、9-18 頁

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Minami, Hiroshi, “ A quienes sirve la Arqueologia Publica? – Un vinculo entre la arqueologia y el publico local, I SIMPOSIO DE ARQUEOLOGIA PUBLICA EN EL SALVADOR “Mas alla de la arqueologia: Arqueologia Publica”, 26th.Oct.2018.

南 博史『ニカラグア共和国マタガルバ県マティグアスにおける考古学と博物館を仲介者とした実践的研究』、第 8 回世界考古学会議京都大会、同志社大学、2016 年 8 月 29 日。

南 博史『文化財ガバナンスの構築』、日本ラテンアメリカ学会第 37 回定期大会、京都外国語大学、2016 年 6 月 4 日。

〔学会発表〕(計 3 件)

Minami, Hiroshi, Uemura, M., Balladares, S. y Lechado, L. “ Proyecto arqueologico Matiguas -Informe Final Jornada 2017- “ , Museo de Culturas Internacionales, Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto, 2018,63p.,pp.1-8.

Minami, Hiroshi, Uemura, M., Balladares, S. y Lechado, L. “ Proyecto arqueologico Matiguas -Informe Final Jornada 2016, Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto, 2017,24p.,pp.1-5.

〔図書〕(計 2 件)

〔その他〕

京都外国語大学 HP 『掘れ惚れニカラグアダイアリー』
<http://www.kufs.ac.jp/blog/department/ielak-horebore/>

6. 研究組織

(1)研究分担者

嘉幡 茂

KABATA SHIGERU

メキシコ合州国ラスアメリカス大学

社会科学部人類学科

准教授

60585066

(2)研究協力者

サグラリオ バジャダレス

SAGRARIO BALLADARES

レオナルド レチャッド

LEONARD RECHAD

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。